

目的 鎌倉時代から室町時代の染織文化の歴史を考察するに当たり、生活様式や服装の変化をふまえて、染織の意義について述べてみたい。特に「婆沙羅」から始まったこの時代の様式の意義や、これらの様式を生み出してきた非農業民に焦点を当て、検討する。また、南北朝という転換期での日本の風俗や服装の変化についても触れてみたい。

方法 主に文献により考察をすすめる。また、絵巻物により、当時の衣服の様式を推測していく。

結果 庶民の服の色と文様は、大和朝廷支配下で律令制により制限されてきたが、鎌倉時代までには、縄文時代の精神を引き継ぎ、復活している。この文様や色は呪術との関係が深い。特に、非農業民である職能民が着ていた「摺衣」から始まる庶民の服は、鎌倉時代末期以降始まる「婆沙羅」の様式に影響を与えている。

「生命保護」を目的として発達した染織や文様や衣服自体の形態は、鎌倉時代から大きく変化し、新しく発見された染色方法や、新しく大陸から入ってきた繊維により改善されていった。しかし、庶民から守護大名にまで広まり、持て囃された「婆沙羅」は発達していくが、南北朝という時代の転換期において、手工業者の活動が呪術性を失うとともに、衣服の色や文様からも呪術性が失われ、世俗的なものとなっていった。また「婆沙羅」の派手で華麗な面だけに重きが置かれ、生命保護や生活の改善は徐々に軽視されていくようになる。